

希望という名のあなたを訪ねて

小川 清

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



1970年、物悲しいメロディーに乗せて「希望という名のあなたを訪ねて…」と歌った岸洋子の「希望」は、大人の歌として人の心を捉えて大ヒットしたが、若かった私には、低い声で淡々と抑えた歌唱法は、何だかとても暗く違和感があった。しかし、今聞いてみると包み込むような包容力のある歌い方と相まって、本当にいい曲だと感じる。若かったころは希望がいっぱいあったが、誰もが大人になれば希望を失い、そして失った希望に再び巡り合える旅に出ると歌う。

季節は巡り、時は流れて春五月。養成校を卒業し、国家試験に合格した2,377人の皆さまが、希望に胸を膨らませて診療放射線技師という職に就き、それぞれの職場で元気に働き始めたことと思う。新人さんに頑張ってもらいたいのは当然ながら、経験を積み重ねて育つ時代ではない時代だからこそ、先輩諸氏には新人技師をぜひとも一人前の診療放射線技師に育て上げていただきたい。

日本診療放射線技師会（以下、本会という）への平成27年度新卒入会者数は607人、2年目以上を加えても1,455人、つまり初年度でいえば、国家試験合格者の29.0%しか入会していない。これは、最近増加しつつある養成校の卒業生数に対して、新卒入会者数が増えない現状と相まっての結果である。そして本会の組織率は平成17年度まで70%以上で推移していたが、平成23年からは50%台に落ち込んでいる。他の医療技術系の職能団体が70から80%を超えていることと比較するとあまりに低い。多様化社会、そして個人主義が優先される現在において、他の職能団体の入会率も低下気味と聞かすが、本会は低すぎる。本来、職能団体はその職能の向上を目指して存在するものであり、そのためには、全員が入会して診療放射線技師の組織集団として活動していかなければならないはずであるが、診療放射線技師の環境はそれほど恵まれているのだろうか。

入会に結び付ける要因として、一般的には①得になること②最新情報③興味を引くこと④手っ取り早くカンタンにできること——の4つであるといわれている¹⁾。診療放射線技師になったのだから診療放射線技師会に入会するのは当たり前だとわれわれは言い放ってきたが、①から④をカバーしているか自問したい。

入会には都道府県診療放射線技師会（以下、地方技師会という）との連携が欠かせない。身近な環境で先輩や上司から誘われれば入会が進む。われわれはほとんど有無を言わずに入会してきた世代であるが、ある程度の勧誘は会員の役目だと思う。一方で、会費が高いと言われる。確かに地方技師会費を加えれば負担はあるかもしれないが、自分たちの将来を考えた活動費としてご理解いただきたい。現在、JARTIS会員情報システムで基礎会員情報や会費徴収などが本会での作業として、また他の業務も標準化されれば本会事務局での対応が可能となり、全体として地方技師会事務局の業務量を削減できる可能性もある。一方で、外から目線で考えると検討すべき事項も多い。例えば本会の認定診療放射線技師は、現在の規定では本会会員しか入れないが、本当にそれでいいのか。ハードルは高くてもいいから非会員にも門戸を開くことで国民から評価され、その後、会員になっていただけたらうれしい限りだ。

昔から今日まで、若い人に「診療放射線技師に未来はありますか」と尋ねられてきた。ハード（装置）とソフト（患者）の懸け橋としての診療放射線技師の仕事は素晴らしい仕事ではあるが、このままでは将来は暗い。「希望」に満ちあふれた明るく輝く未来にするには、約52,000人といわれる日本中の診療放射線技師が一丸とならなければいけない。

引用文献：1) ジョン・ケープルス著「ザ・コピーライティング」